

地学オリンピック

eラーニング

eラーニング教材映像の作り方



株式会社アルファ企画
東京都渋谷区松濤1-4-9 サンエルサビル307
03-3466-3336
info@alphakikaku.com

アルファ企画のeラーニング制作

アルファ企画のeラーニング映像の制作では、

先生方が作成された
レジュメ（シナリオ）

先生方が作成された素材（映像素材
やパワーポイントなどの資料作成）

これらを用いて、アルファ企画がクロマキー合成による「Person in Presentation」という方法で1本のeラーニング教材として作り上げる。という流れとなります。

もちろん、シナリオ制作や映像素材・パワポ素材に関するご相談には、随時のらせていただきますし、特に映像素材作成時に必要となるカメラなどの機材に関しても、提供・技術協力させていただきます。

動画の制作手順

企画

- どんな動画をつくるのか？その動画の目的やコンセプト等を明確にします。

シナリオ

- コンセプトが決まったら、シナリオを作ります。

撮影

- シナリオが決まったら、その撮影をします。

編集

- 撮影した映像や、画像素材や音楽素材等を、組み合わせていきます。

配信

- 作った動画をインターネットで見ることができるようになります。

**ただ、こういう話をすると、とても難しそうに感じるかもしれませんが。
それでも、よく考えると、ブログを書いている人も、似たようなことをしています。**

ブログの制作手順

企画

- 今日は、どんな記事を書くか考えます。

シナリオ

- 記事のストーリーを決めます。

素材
制作

- 写真を集め、文章を書きます。

体裁を
良くする

- 出来上がった文章の、色を変えたり、文字の大きさを変えたりして、見やすくします。

投稿

- 作った記事を投稿します。

つまり、ブログを書いている人は、これまでと同じような考え方ではじめることができるわけです。
ただ単に、制作するものが「写真と文章」から、「映像」に変わっただけで、基本的な流れは、変わりません。

動画のシナリオ

わかりやすい動画を作るには、どういふシナリオ構成が良いのか？
その基本パターンをご紹介します。

授業をされている先生方には釈迦に説法ですが、理論的に話す際のシナリオというのは、ある程度決まっています。その構成というのは、下のようなシナリオです。



動画のシナリオ

1) オープニング

- これは、いわゆるつかみです。

2) 概要

- 「この動画で、どんな内容の話をするのか？」大まかに説明します。
- 「どんな内容」を「どういう順番」で話していくのか？を明確にすることが大切です。そうすることで、視聴者は、話を受け入れる準備ができるので、理解しやすくなります。

3) 背景

- 「どうして、自分が語る内容に、聞く価値があるのか？」を解説します。
- 本論に入る前に、「この人の話をちゃんと聞いた方がよいか？」と思ってもらうことが大事です。
- 自分の経験や実績を取り入れるのが良いと思います。

動画のシナリオ

4) 本編

- 2)の概要を話した際に述べた順番で、詳細を解説していきます。

5) おさらい

- その動画で、どんな内容の話をしたのかをおさらいします。
2) 概要、で述べたことを、再確認する形です。

6) クロージング

- 最後に、今回の動画のまとめをします。
- 案内や、お知らせも行っています。

以上のような6つのかたまりを作るように考えてシナリオを構築し、パワーポイントや写真・映像を用意すると、わかりやすい動画を作ることができます。

動画の印象を良くする5つのポイント

オープニングで
惹きつける

- 動画の再生ボタンを押した後、人は、その動画を見続けるかどうかを、5秒～13秒で決めると言われています。最初に映る映像や画像、音楽等で、注意を惹くことが大切です。文章でいうところのキャッチコピーですね。

明るい場所で
撮る

- 映像が暗いと、どうしても印象が暗くなってしまいます。撮影するときは、できるだけ明るい場所で撮るようにしましょう。照明や、太陽光をうまく使うのも良いと思います。

はっきりした
音声を録る

- 動画のクオリティを左右するのは、どちらかという、音声だと思っています。「滑舌よく話す」、か、「マイクを自分の近くに置く」、ということをして、はっきりとした音声を収録することを気を付けると良いと思います。

話の継ぎ目に
動きを入れる

- 人が動かないものを見続けられるのは、6秒までと言われています。同じ場所にとどまって、話を続けるだけの動画の場合、ものすごく面白い話でない限り、途中で飽きてしまいます。話の継ぎ目に動きを入れる工夫をするだけで、わかりやすい動画になり、印象がよくなります。

シンプルなテロップ
を入れる

- 音声だけで伝えるよりも、ビジュアルで伝えた方が、印象を残すことができます。文字を効果的に使うことで、伝えたい内容をよりわかりやすく伝えることができます。

動画の印象を悪くする3つのポイント

さきほどは、「こうしてくださいね」というポイントをお伝えしました。
ここでは逆に「これはしないでね」という注意ポイントです。

多くの色数を
使いすぎない

- たとえば、オープニングや、テロップの色などです。
素人っぽく見える映像は、「これでもか」というくらい様々な色を使っています。
- 配色の勉強をしたことがある人は、わかるかと思いますが、配色に慣れないうちは、使う色の種類を3～5色（白、黒、プラス1～3色）にした方が見栄えがよくなります。

変わった
トランジションを
使わない

- 編集ソフトには、いろいろなトランジションが用意されています。スライドしたり、スピンしたり、分割したり。でも、凝ったトランジションを使えば使うほど、素人っぽさが増します。
- 使うトランジションは、クロスディゾルブなどの、シンプルなものだけにした方が無難です。

ズームを
多用しない

- 最近のカメラはズーム機能が優れていて、映像効果も大きいので、小さいものや注目したいものにズームをかけたり、目一杯アップから引いてきたりしたくなりますが、このズーム機能というものは人間の目には無い機能ゆえに、視聴者の感情と一致していないと不快感を与えるものになってしまいます。
- 近くのを映すときはカメラ自体が被写体に寄り、引きの絵を撮るときはカメラ自身が下がることを、基本とします。

テンポのいい動画を作る

動画をはじめたばかりのときは、どう撮ればよいのかわからないので、とにかく、録画ボタンを押したまま、撮りっぱなしにしてしまうことが多いです。
でも、そうしてしまうと、映像が長々となってしまって、「飽きやすい動画になったり」、「編集が大変になってしまったり」してしまいます。

そのため、メーカー側も工夫していて、たとえば、Canonのカメラには、ビデオスナップ機能というものが付いています。
ビデオスナップというのは、「4秒間と設定したら、4秒間しか撮れない。」そんな機能です。
他のメーカーのカメラにも、似たような機能があるかもしれません。

このビデオスナップを使った場合は、写真を撮るかのように、短い映像を沢山撮影してゆきます。
そして、あとの編集作業で、その動画たちを並べます。
たった、これだけでのことなのですが、すごくテンポの良い映像になってしまうから不思議です。

つまり、「短い映像を沢山撮ってから、あとで繋げる」だけで、どんな人が作っても、テンポのいい動画が出来上がるというわけです。

このことを意識すると、簡単に映像素材が作れます。

しかし、これだけですと今度は逆に説明不足で内容の伝わらない映像になってしまう恐れもあります。
これを防ぐのが、クロマキー合成による「Person in Presentation」という方法です。

動画制作における時間感覚

5秒～13秒

- 人がプレイボタンを押した後、その動画を見続けるかどうかは、5秒～13秒の間に決めると言われています。視聴者の興味を引き付ける“つかみ”が大事ということです。
- ですので、この最初の時間の映像には、多くの動きをつけ、カッコよく見栄えのする映像にします。

6秒

- 止まったままの映像が6秒以上続いてしまうと、飽きてしまいます。特に、インタビューやひとり語りの動画は、映像に動きもなく、飽きることが多いです。
- テロップを入れたり、映像の構図を変えたり、パンクロップで動きを付けたり、と工夫することが必要になります。

1分

- 1分間で300文字。アナウンサーが話す速さの目安です。これは、原稿を作るときの文字数の目安になります。たとえば、2分以内の動画を作る場合、文字数は、600文字以内となります。

2分

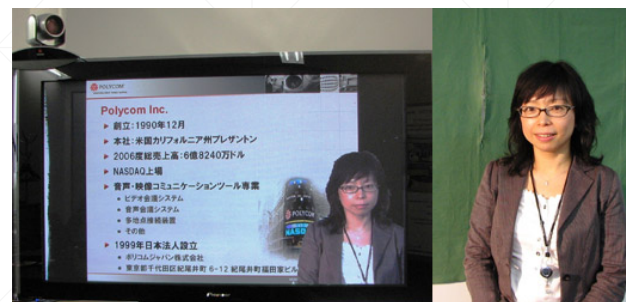
- 動画の長さが2分以内であれば、90%の人が最後まで見てくれると一般的に言われています。3～5分の場合は、70%程度。それ以上の長さになると、一気に下がります。ただし、「長い動画は絶対にダメなのか？」というと、そうとも言えず、15分を過ぎても見続けている人がいた場合、その人たちは、そのまま最後まで見続けてくれることが多いです。

15分

- テレビ放送を見ていると、15分ごとにCMが入ります。これは、人の集中力が持続する時間に合わせていると言われています。
- ユーストリーム等で、長時間の放送をしている人は、休憩を入れる等の工夫が必要です。

クロマキー合成

クロマキー合成とは、緑とか青といった特定の色の成分を透明にし、そこに別の映像を合成する技術のことです。



テンポよく撮られた映像素材をつなげたものや、パワーポイントによる説明などを、人物が身振り手振りで、直接ユーザーに語りかけるように説明・解説することで、今まで以上に「伝わる」映像へとまとめあげることができます。これこそが、クロマキー合成による「Person in Presentation」という方法です。

また、クロマキー合成では、前述のとおりパワーポイントなどに先生を合成することができますが、より高度な「Virtual Studio」としての使い方もございます。これにより、狭い会議室などでもスタジオからお送りしているような映像を作ることが可能になります。

